

【様式2】平成27年度部局目標(水産試験場)

個別目標

番号	区分※	目標項目	目標設定の理由	目標値・目標の内容	目標達成に向けての手段等	基本構想に係る実施計画の関連箇所	担当課
1	①	琵琶湖沿岸帯や内湖の水産資源の再生産の場としての評価と活用技術の確立	かつて琵琶湖沿岸帯(南湖)や内湖はニゴロブナやホンモロコの再生産の場として高い機能を有し、水産資源の増大に寄与していました。資源造成型栽培漁業の推進のためには、これらの場の機能評価と活用が必要です。	・過年度に放流したニゴロブナとホンモロコの琵琶湖沿岸帯や内湖への回帰および産卵状況の把握	・両魚種の琵琶湖沿岸や内湖で産卵親魚の採集を行い、過年度標識放流魚の動向を把握するとともに、周辺の産卵状況から産卵環境の評価を行います。	施策4-1 琵琶湖環境の再生と継承	
				・昨年度に南湖に放流したニゴロブナとホンモロコの回帰および産卵状況の把握。	・南湖の放流場所を中心に来遊するニゴロブナやホンモロコ親魚の採集調査やその産卵状況を調査するとともに、放流魚の追跡調査を行います。		
2	①	自然の生産力を活用したセタシジミ資源の回復技術の開発	かつて6,000トンほどあったシジミの漁獲量はH25年には64トンまでに落ち込んでいます。そこで北湖において、種苗放流ではなく自然の生産力を利用してセタシジミの資源を回復させる技術の開発が必要です。	・漁場への構造物設置によるセタシジミ生息環境の改善効果の把握	・実際の漁場に設置したエリ支柱構造物に垣網を追加し、セタシジミ稚貝の生息状況を把握します。 ・構造物設置による流速などの物理環境測定・餌環境の分析を行い、その環境改善状況を調査します。	施策4-1 琵琶湖環境の再生と継承	
				・内湖等で垂下し肥育したセタシジミ親貝による増殖効果の把握と放流技術の検討	・西の湖で垂下した親貝の肥満状況、放流後の産卵状況の調査を行います。 ・親貝の適切な肥育場所、時期、垂下方法等の効率的な放流技術について検討します。		
3	②	沿岸漁場環境の現況把握と改善策の提言	漁業者から下水道放流水の魚類や生態系に対する影響を心配する声が多く寄せられており、科学的な調査に基づき影響の有無を確認し、その情報を県民に伝えることが重要です。	・生活排水処理水による河川環境や魚類の行動への影響の有無の確認。	県内農集排水の放流先の幅広い実態調査を実施します。	施策4-1琵琶湖環境の再生と継承	
				琵琶湖沿岸では漁網の汚損等の問題が続いており、環境条件等との因果関係をふまえた対策の提言が必要です。	・刺網が汚れる条件(水質やプランクトン量など)の把握。		

4	①	特産魚貝類の養殖技術の確立と普及	<p>アユ養殖場では冷水病が発生して被害が生じるが、治療薬は1剤しかなく、被害が食い止められない事例がある。また、イトワヅエ・イワケシ感染症については治療薬はない。このため、これら疾病による被害軽減のため、治療薬への承認を目指して有効性の確認が必要です。</p>	<p>アユのビブリオ病治療薬として承認されているフロルフェニコールが冷水病およびイトワヅエ・イワケシ感染症に効果があるかを確認します。</p>	<p>アユに冷水病およびイトワヅエ・イワケシ感染症に人為感染させ、フロルフェニコールを経口投与することで死亡率を軽減できるかを確認します。</p>	<p>施策5-1滋賀の強みを活かした農林水産業振興と魅力ある農山漁村づくり</p>
			<p>琵琶湖固有種のビワマスの特産養殖魚として普及するための技術開発とその指導が重要です。</p>	<p>より高品質な養殖ビワマス育成技術開発とその普及。</p>	<p>飼料の改良による肉質向上のほか、種苗の高品質化として四倍体作出による三倍体化率の向上手法検討や、ホルモン剤を使わない偽雄の作出(ふ化後の高水温飼育)を行います。</p>	<p>施策5-1滋賀の強みを活かした農林水産業振興と魅力ある農山漁村づくり 施策5-2滋賀のブランド力向上と地産地消の推進</p>
5	④	アユ資源動向把握技術の開発	<p>H24年にアユの産卵量が大きく減少する事象が発生し、その要因の解明と、このような事象の発生を予測し、有効な増殖対策を行うための、より精度の高い資源動向の把握技術が必要です。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 餌料環境と生残の関係把握 ・ 魚群構造の把握 ・ アユの遺伝的特性の変化の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アユの肥満度低下の原因となる餌環境と生残(減耗)の関係を飼育実験等により明らかにします。 ・ トロール網等を用いて魚群を構成する魚種の確認や沿岸域を含むアユの分布域・数量を明らかにします。 ・ DNA情報の解析により産卵量激減前後の遺伝的変化の有無を確認します。 	<p>施策4-1琵琶湖環境の再生と継承</p>
6	①	オオクチバスの「リバウンド」現象の原因解明と未成魚の駆除技術開発	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内湖でオオクチバスの親魚と仔稚魚の効率的捕獲を行ったところ、在来魚が増加する一方でオオクチバス当歳魚が急増する「リバウンド」現象が起り、完全駆除を目指すにはこの原因解明と対策研究が必要です。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ オオクチバス「リバウンド」現象の原因解明 ・ 未成魚に特化した効率的駆除技術開発 	<ul style="list-style-type: none"> ・ オオクチバス未成魚の生残率が高くなる原因を飼育実験や胃内容物調査によって明らかにします。 ・ オオクチバスのサイズや季節ごとの生息場所の詳細調査を行うとともに未成魚の効率的な捕獲方法の開発を行います。 	<p>施策4-1琵琶湖環境の再生と継承</p>

7	①	<p>新たな外来魚の拡散防止および効率的駆除技術開発研究</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・H25年以降、瀬田川でチャンネルキャットフィッシュが急増しました。また、ダム湖からの流出が疑われるコクチバスが北湖で捕獲されました。これらの現状把握と生息域拡大防止のための効率的駆除技術開発が急務です。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チャンネルキャットフィッシュとコクチバスの生息状況把握 ・チャンネルキャットフィッシュの生態的特性把握 	<ul style="list-style-type: none"> ・繁殖場所や分布域拡大の可能性の高い水域において、捕獲調査等で生息状況を明らかにし駆除技術開発につなげます。 ・不明な生態的特性を飼育実験や音波発信機を用いて解明し駆除技術開発につなげます。 	<p>施策4-1 琵琶湖環境の再生と継承</p>	
8	③	<p>琵琶湖の水産生物生産力評価に関する研究</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・在来魚介類のにぎわい復活のためには、魚介類減少要因を餌の観点から取上げ、主な水生生物の現存量の試算とそれらの摂餌利用に関する知見の収集が必要です。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主要魚介類の資源量推定 ・餌生物実態調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・主要魚介類の資源量(現存量)を水産資源学的手法を用いて推定します。 ・飼育可能な魚介類について、動物プランクトンの捕食量やそれに基づく成長量、餌生物と水産資源との関係を飼育実験により明らかにします。 	<p>施策4-1 琵琶湖環境の再生と継承</p>	

※「区分」欄は、新たに策定する「行政経営方針」に定める以下の3つの基本的な視点から該当する番号を入力してください。

①:「攻め」の視点

- ・「最少の経費で最大の効果」が得られるよう、高いコスト意識を持ち、無駄の排除、選択と集中を徹底し、「滋賀ならではの」「滋賀から」「滋賀のために」を実現する視点
- ・本県の強み・弱み、現場のニーズ、地域ごとの課題等を把握・分析した上で、あるべき姿を明確にし、「実施」だけでなく「結果」を重視した、次につながる視点

②:「見える」の視点

- ・情報の受け手側が求める情報をわかりやすく、タイムリーに発信し、県政の一層の透明化を図るとともに、対話を通じて、県政への理解と共感を得ることに努め、県民にとって身近で、見える視点

③:「前向き」の視点

- ・人員や財源に限られた中であっても、人材や組織、施設、情報など県の経営資源の質を一層高め、有効活用や効果的・効率的な配分を図ることなどにより、県庁力が最大限発揮される視点
- ・前例踏襲ではなく、チャレンジ精神や創意工夫を発揮しながら、目標や使命の達成に向けて、スピード感、グローバルな視点を持って、果敢に取り組む視点

④:その他 ①～③以外のもの